

JICA 海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

7
2025
JULY

特集

歴史に息づく隊員の奮闘

TICADと協力隊

派遣国の横顔 [ケニア]

協力隊初代派遣の一国にしてアフリカ初の派遣国
人材の育成に数多くの隊員が貢献



青少年活動隊員として幼稚園や小学校を巡回しています。この日は
休み時間中の子どもたちにけん玉を披露しました（マダガスカル）

スポーツを通じた国際貢献は大切 皆さんの活動が誰かの人生を照らす

たかはしなおこ
高橋尚子さん

シドニーオリンピック金メダリスト

中学時代から陸上競技を始め、実業団時代に国内外の大会で6回の優勝を飾る。2000年、シドニー五輪で金メダルを獲得し、国民栄誉賞を受賞。08年に現役を引退し、マラソン解説者などとして活動するほか、公益財団法人日本陸上競技連盟評議員、公益財団法人日本バラスポーツ協会理事などを務める。「スマイル・アフリカ・プロジェクト」では途上国の児童たちに10万足のシューズを寄贈するなど社会貢献活動にも取り組む。過去にはJICAオフィシャルサポーターを務めるなど、JICAプロジェクトや協力隊事業を国内外に広く伝えている。



2011年に当時のJICAオフィシャルサポーターに就任し、これまで14カ国を訪れ協力隊員の活動に触れてきましたが、どの隊員からもとても大きなパワーを感じました。

あるケニア隊員の任地は、水不足のため川からの水くみが欠かせないところでした。隊員に誘われて私も水くみを体験したところ、「こんな不便なところで暮らしていけるのかな?」と心配になるほどでした。ところが本人は現地に溶け込んで楽しそうに生活していて、その頼もしい姿が印象的でした。

ミャンマーでJICAプロジェクトのワークショップを視察した時には、参加していた住民から、「かつて協力隊員が井戸を整備してくれて、安全できれいな水が手に入り、生活が楽になった。この井戸を後世に残していくことが私たちの役目だ」と言い、活動の成果が本人の帰国後も「足跡」としてしっかり残っていることに感動しました。

これまでに会った隊員の中にはスポーツ分野の方も大勢います。

途上国の学校では体育の授業が十分に行われておらず、体力水準が低い子どもが多く見られます。今もさまざまな派遣国で隊員が基本的な運動を教えています。子どもの頃からしっかりと基礎体力をつけていくことは大切です。

また、「時間やルールを守ること、チームメンバーやコーチ

ら皆と協調性をもって取り組むことなど、競技以前のことから指導している」という話も隊員からよく聞きます。そういった人間性を育てる指導は、子どもたちが大きくなった時に、必ずプラスになることです。ブータンで陸上競技の教室を行った時も、「僕は陸上競技をとっても真剣にやってきたけれど、それがなかったら、きっと良くない道に入っていたと思う」と選手の男の子が話してくれて、スポーツには、人を本気にさせる力、更生させる力があるのだと感じました。

私は、隊員の方々に対しては尊敬の気持ちでいっぱいです。皆さん、自分に何が求められていて、どう動けばよいか、置かれた環境で工夫しながら達成していく力に長けていると思います。

今、活動中の隊員の方の中には、活動が思うようにいかず、悩まれている方もいるかもしれません。しかし、小さな一歩も必ず誰かの人生を照らす光になります。自信を持って、活動に取り組んでほしい。そして、任期終了後は、培った対応力やコミュニケーション能力を生かして、国際協力や途上国に関する見識を一層広げてほしいです。

協力隊発足から60年間にわたり活躍してきた約5万7,000人の隊員たちの足跡は、世界のいたるところに残っています。それは私たち日本人の誇りでもあります。



COLUMN — 表紙によせて

現地の幼稚園や小学校を巡回して運動や工作などのアクティビティを行っています。この日は休み時間中に訪問すると、子どもたちが笑顔で駆け寄ってきました。そこで、持参した「けん玉」で技を披露したところ、歓声をあげて喜んでくれました。目を輝かせて見つめる表情がとても印象的で、こうした交流からたくさんの喜びをもらっています。
夏目明咲さん（マダガスカル／青少年活動／2023年度3次隊・愛知県出身）

国別索引	掲載ページ
エルサルバドル	22
ケニア	5、6、7、8、15
コスタリカ	22
ザンビア	14
シリア	9
セネガル	23
フィリピン	11
ベナン	13
ペルー	16
マダガスカル	1
ミクロネシア	14、18
南アフリカ共和国	24
モロッコ	4、23

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	13
村落開発普及員	4
食用作物・稲作	5
稲作	11
マーケティング	22
青少年活動	1、8
環境教育	15、16
陸上競技	9
ソフトボール	22
PCインストラクター	24
体育	14
小学校教育	23
考古学	18
家政	6
保健師	7

出身都道府県別索引	掲載ページ
青森県	23
山形県	16
千葉県	13
東京都	4、15、24
神奈川県	14
長野県	8
静岡県	7
愛知県	1
大阪府	5
兵庫県	22
奈良県	18
山口県	9
大分県	6

CONTENTS

2 JICA海外協力隊発足60周年 特別インタビュー

3 CONTENTS／索引

4 JICA Volunteers' Reports

5 知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから 派遣国の横顔 [ケニア]

9 お悩み相談 アドバイスを聞きました！

10 [特集] 歴史に息づく隊員の奮闘 TICADと協力隊

16 スキルや意欲で道を開く 就職ストーリー

18 派遣から始まる未来 先輩隊員たちの社会還元

20 INFORMATION — JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

21 JICA海外協力隊派遣現況

22 あの日、地球の、あの場所で。

23 隊員めし — 任地の食生活に彩りを！

24 公開！私の派遣国生活 [南アフリカ共和国]

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に9回発行しています。

【凡例】JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協力子さん（ケニア／環境教育／2025年度1次隊）			
氏名	派遣国	職種	隊次

JICA海外協力隊には、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。



見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォント
を採用しています。





ライフワークとなった“水辺の安全”への活動 いつか任地にも貢献したい

なかがわ やすこ

中川容子(旧姓 堤)さん(モロッコ/村落開発普及員/2001年度1次隊・東京都出身)

モロッコ北部の漁村、ムーレイ・ブッセルハムで村落開発普及員としての活動を経験し、帰国してから20年余り。現在は日本国内の企業でマーケティングの仕事に従事する傍ら、日本ライフセービング協会の国際室理事、そして国際ライフセービング連盟アジア太平洋地区の理事を務めています。日本がアジア太平洋地区における溺水(※)防止に向けて貢献できるよう各国と連携を進めていて、コロナ禍前の2019年にはミクロネシアを訪問し、現地の協力隊員たちにも案内してもらいながら、溺水の現状について現地調査をしたこともあります。

元々は大学生時代にクラブ活動でライフセーバーを始めて以来ずっと続けていて、私の協力隊での派遣先が決まる経緯にもその経験が少しだけ関わっていました。面接時のこと、「家に電気も水も通っていない漁村で、突然船に乗ってと言われても、ライフセーバーのあなたなら大丈夫だね?」と面接官から言われた流れもあって、ムーレイ・ブッセルハムでの要請に決まったのです。現地での活動自体にライフセービングの技術が関わっていたわけではないのですが、そんな縁で任地とのつながりが生まれました。今でも当時お世話になった大家さん一家と連絡を取ったり、任地を再訪したりもしていて、協力隊員として過ごした経験は私にとってかけがえのない心の財産となっています。

ただ、数年前に現地から悲しい知らせがありました。まだお母さんのお腹の中にいた頃からよく知っていた村の少年、オットマーン君が、井戸に転落して亡くなったというのです。井戸には蓋がなく、外へ出るための手段も講じられていませんでした。

ライフセービングの観点からいえば、事故が起きてからの救助・救命以上に、事故を未然に防ぐことがとても重要になります。途上国では、例えばお母さんが水場で家事をしている時に幼児が池に落ちたり、たくさんの人が通勤・通学で小舟に相乗りして事故に遭ったりと、水難事故の起こり得る場面は無数にあります。しかし、「水辺のどこが危ないのか」「天気の状態はどうか」といったことを事前に確認したり、子どもだけで遊ばせず大人がきちんと見ているようにするといった、基本的な安全教育と知識があれば、防げる事故は多くあります。オットマーン君の時も、ちょっとした注意で命を守れたのではないかと思います。胸が締め付けられます。

2021年、国連総会で溺水防止の世界的取り組みに関する決議が採択され、7月25日が「世界溺水防止デー」と定められて水辺の安全についての取り組みが各国で行われてきました。私も仲間と共に決議の邦訳をしていて、世界溺水防止デーをきっかけに少しでも溺水を減らすために考える機会ができればと、SNSなどでキャンペーン情報を発信してきました。学生時代、協力隊時代を通して、今や私のライフワークとなっているライフセービング。いずれはムーレイ・ブッセルハムを訪ね、現地の皆のために水辺の安全について伝えるワークショップを開きたいと願っています。

World
Drowning
Prevention
Day 25 July

※溺水…水などの液体で溺れたり顔が塞がれたりすることによって気道が閉塞し窒息することを指す。



上：ミクロネシアで2019年に実施した現地調査の関係者
左：任地で、オットマーン君とその母親との一枚

派遣国 の 横顔 〈ケニア〉

Profile of
the partner country of JOCV

協力隊初代派遣の一国にしてアフリカ初の派遣国
人材の育成に数多くの隊員が貢献

Text=池田純子 写真提供=ご協力いただいた各位

お話を伺ったのは



しん かわ まこと
晋川 眞さん

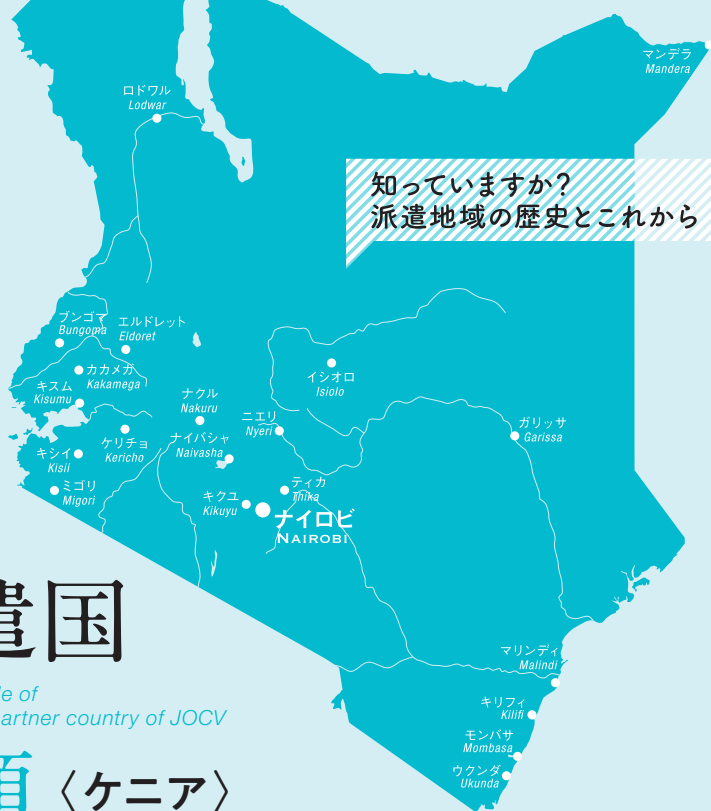
(ケニア/食用作物・稲作/1994年度3次隊・大阪府出身)
JICAケニア事務所長。1995年、協力隊員としてケニア西部のブンゴマに派遣され、農家への養鶏普及や学校でのヒヨコのふ化・販売の指導などを行う。98年に国際協力事業団(現JICA)へ入職し、農村開発部、JICAガーナ事務所、JICAエチオピア事務所、人事部などを経て2024年から現職。

ケニア独立から3年目の1966年3月、当国初の協力隊員として建設機械隊員2人と電気工事隊員1人が赴任しました。その後、理数科教育などの人的資源部門のほか、職業訓練部門、スポーツ部門まで幅広く派遣されていて、81年にJICAの支援で創立したジョモケニヤッタ農工大学では多くの隊員が人材育成の土台づくりに貢献してきました。同校は今、日本やアフリカ国内の大学、また日本企業らの連携を包含するプラットフォームとしてさまざまな人が活用する場になっています。

現在の隊員派遣は、対ケニアのODA基本方針であるインフラ整備、産業開発、農業開発、保健、環境、地域安定化の6本柱にひもづけた要請が中心で、コミュニティ開発や青少年活動、環境教育に関わる職種が多い傾向です。青少年活動隊員の中には、非行少年の更生など、非常に難しく、現地でも人材が不足している分野に取り組んでいる方もいます。

事務所長として各地の行政関係者らと話す、協力隊活動への理解が深く、JICAや日本に対する評価も高いことに驚かされます。また、中学校で協力隊員に教わっていたというナイロビのタクシー運転手から、「時間を守る大切さは隊員から教わった」と聞いたことも印象に残っています。彼はおかげで多くの人と信頼関係を結ぶことができ、仕事に役立ってい

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから



ケニア共和国
Republic of Kenya



ケニアの基礎知識

面積：58.3万km² (日本の約1.5倍)
人口：5,403万人 (2022年、世界銀行)
首都：ナイロビ
民族：キクユ民族、ルヤ民族、カレンジン民族、
ルオ民族、カンバ民族など
言語：スワヒリ語、英語
宗教：伝統宗教、キリスト教、イスラム教

※2024年10月21日現在
出典：外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kenya/>

派遣実績

派遣取極締結日：1966年3月31日
派遣取極締結地：ナイロビ
派遣開始：1966年3月
派遣隊員累計：1,820人
※2025年5月31日現在
出典：国際協力機構 (JICA)



写真：久野真一/JICA

ナイロビ郊外のジョモケニヤッタ農工大学では40年以上もJICAの協力が続き、現在も土壌肥料隊員が赴任中。プロジェクトのチーフアドバイザーとして赴任している専門家も、元ケニア隊員だという

ると話してくれました。歴代隊員の地道な活動が着実に足跡を残しているのだと、さまざまな場面で感じています。

私が隊員としてケニアにいた30年前と比べると都市化・デジタル化が進み、協力隊の現場も様変わりしていますが、根本的に変わらないのは、常に隊員が“理不尽”にさらされながら活動や生活をしていること。水が出ない。電気も来ない。人も時間どおりに来ず、しばしば約束が裏切られる。そういった理不尽さに対処していく中で、隊員たちは日々鍛えられ、成長していくのだと思います。ただ、ケニア人は日本人と非常に似ている面もあります。家族を大切にして礼儀正しく、相互扶助の精神があり、空気を読む。日本人が評価されるのもそんな国民性に合っているからかもしれませんし、隊員たちの中には、それを踏まえて接することでより円滑な活動を展開している人もいます。

奥地前進主義の時代から現代まで
ケニアの発展に貢献してきた
協力隊員たち

アフリカ観の原点となった現地訓練
協力隊で「生きる力」を教わった

白鳥くるみさんが家政隊員としてケニアへ赴任したのは、1966年の同国への協力隊初派遣から13年後。約120人いたケニア隊員たちは、当時の協力隊のイメージとして語られる“奥地前進主義”の言葉どおり、大半が地方に散らばっていて互いの連絡もままならないほどだった。

白鳥さんの任地は首都ナイロビから北東に約100km、ケニア山の麓に位置する町、ムランガ。日本からの着任直後に一般家庭で3週間ホームステイする現地訓練があり、ムランガの村人が暮らす、マッシュルームハウスとも呼ばれる土壁でできた円形の小屋に滞在させてもらうことになった。「この生活が過酷で、水くみに往復2時間。食事は豆を煮込んだギゼリと、炭火で焼いたデントコーンがほぼ毎日。寝床のマットレスはダニやノミだらけで、番犬代わりのヤギが隣に寝ていました。ですが、家族やご近所同士が集まって談笑しながらご飯を食べ、ゆったりした時間の中で暮らす姿が印象的で、現地に受け入れられた感覚がありました。見たり聞いたりではなく、体験的に人々の暮らしを知った経験は大きく、私のアフリカ観の原点になっています」

体中をくまなく虫に刺されながらも3週間の訓練を終え、配属先のムランガテクニカルカレッジでの活動に入った白鳥さん。当時、配属先で家政コースが新たに立ち上がったことから、カリキュラムの策定やコースのマネジメント全般が要請されていたが、活動はスムーズにはいかなかった。「とにかく物が無いんです。ミシンの講習に布がなく、調理



調理実習の一コマ。家政コースには観光業を目指す生徒が多かったが、村落出身で近代的な家屋やホテルにまったくなじみのないばかりだとわかり、現地に駐在しているヨーロッパ人の自宅を借りてベッドメイキングなどの実習を行った

しらとり
白鳥くるみ (旧姓 川野) さん
ケニア/家政/1978年度2次隊前期・
大分県出身



PROFILE

大学卒業後、家政隊員としてケニアで3年間活動。その後は夫の留学や仕事での随伴、自身の日本語講師やJICA専門家としての仕事でスリランカ、イギリス、タンザニア、インドネシア、エチオピアなどで計30年間ほど海外生活を送る。特に長く暮らしたアフリカに恩返しをしたいとの思いから、2003年に夫とアフリカのOVらと共に「アフリカ理解プロジェクト」を立ち上げ、開発教育の教材作りを中心にセミナーや講座などに取り組んでいる。

実習に砂糖や小麦粉がない。布の代わりに新聞紙を使ったり、食材は手に入る時にストックしておいたり、臨機応変に対応する力が鍛えられました」

ケニアに限らず、先が予測できないアフリカで生きる人たちは、未来のことよりも目の前のことに重きを置きがちだという。「そうした背景を理解しつつも、少しは未来にも備えることを現地の人にわかってもらうのは、非常に難しく。今なら経験も積んでいて具体的な解決策を示すこともできるでしょうが、当時はどう伝えたら響くのかも分からず、思いつく限りのことをするしかありませんでした」。

未来をあまり思い煩わないだけに、寛容でおおらかな傾向の強いケニア人。ただ、さまざまな民族が混在していて、民族ごとの特徴もある。例えば、ムランガで多数派を占めるキクユ族は、政治に関わる人材を多く輩出しているためかプライドが高い傾向があった。

「家政コースの主任もまさにプライドの高い性格で、よく意見の対立がありました。例えばケニアでは教員がとても厳しく高圧的なことがあるのですが、配属先は職業訓練校なので生徒は子どもではなく、20歳前後の大人です。もっと対話的に接したほうがよいのではないかと提案すると、それはケニア的なやり方ではない、とぶつかるわけです」

意見が食い違う中でも、人前で否定するようなことを言わず、相手のプライドを尊重しつつ、言うべきことは伝えるというスタンスで活動を続けた白鳥さん。帰国にあたって主任から思いがけない言葉をかけられた。

「あなたに来てもらってよかった。周りには上司である私に意見を言う人がいない。意見をぶつけ合ったことで自分も学校も成長できた」。相手を尊重しながらも、はっきりと意思を示して相手に接してきた苦労が実を結んだ瞬間だった。

任期を1年延長して3年間の活動を経た白鳥さんは、その後アフリカを中心に約30年を海外で過ごしてきて、協力隊経験が今も生きる基盤になっていると振り返る。

「物がなくても楽しく暮らせるなんて最初は信じられませんでした。その考えがケニアで大きく変わりました。壊れた道具を修理して使い、助け合い、笑い合うのが村の日常でした。物はなくても人生は豊かになる。私の中で、価値観や物事を見る視点が変わった経験でした」



巡回先の村で生ポリオワクチンを接種する様子。管轄域が広大な一方で、芦川さん自身には自転車しか移動手段がなく、各地の医療施設を訪ねるにも苦労した

段取りや管理、整理は日本人の得意技 チャンスを見極めて改善を提案

芦川 咲さんが保健師隊員としてケニア西部、ビクトリア湖の近くのシアヤに赴任したのは2016年。すでに奥地前進主義という言葉は聞かれなくなった時代だったが、それでもまだまだ厳しい環境の任地だった。

「西部は東部に比べて標高が低く、とにかく暑い地域です。マラリアなどの感染率・死亡率も高く、経済状況も西へ行くほど悪くなります。シアヤはインフラも貧弱で、ロバの引く台車で水を売りに来る人がいて、停電も頻繁に起きていました」

配属先の保健センターも課題だらけ。「できそうなところからやってくれたら嬉しい」と言われたが、何かやろうとしても、日本の何十倍も時間がかかる。

「なんてところに来てしまったんだろうと、毎晩泣いていました。でも、とにかく人に頼るしかなかったので、同僚の行くところには全部ついていきましたし、ご近所さんにも挨拶してお茶に行かせてもらい、教会やイベントにも顔を出しました。とにかく現地の人と一緒にいる時間を長くして、助けてもらわないと、どうにもならないと思ったのです」

やがて芦川さんの目に「できそう」なこととして見えてきたのが、巡回診療と予防接種だった。

「配属先の管轄地域には医療施設のない村落が多くあるため、医療機器を載せた車で巡回診療に赴き、住民に対して病気の診察や薬の提供をします。ただ、予定が全く決まっていなくて、『今日は行けそう』という日に突然スタッフを集めて出かける状態。巡回先の最寄りの診療所でピックアップすべきナースも当然おらず、住民も日程を知らなくて集まることができません。前もってナースとも巡回日時を調整してスケジュール表を作って配属先内で共有し、住民にも予定を周知するといった段取りを行いました」

未来よりも今を重視しがちな文化がまだまだ色濃く、将来に備えて備品などを管理・整理する習慣も乏しかった。芦川さんがそれを痛感したのは、予防接種に使うワクチンの消費期限がきちんと管理されておらず、実に4,000人分がダメになってしまった時だ。

「古いものから順に使う考えがなく、しかも冷蔵庫の中身が

あしかわ さき
芦川 咲さん

ケニア／保健師／2016年度2次隊・
静岡県出身



PROFILE

静岡県沼津市役所で保健師として勤務し、母子健康保健に従事。偶然手に取った本で途上国では手洗い習慣の欠如で命を落とす人々がいるということを知ってボランティアに興味を持ち、協力隊に応募。保健師隊員としてケニアに赴任する。帰国後は保健師として作業研修やコロナ禍時の対応を経験し、2023～24年に外務省の国際保健戦略官室で勤務した後、シンガポールで化粧品会社を起業。現在は女性の健康問題解決に取り組む会社を運営している。

グチャグチャなので、手前の新しいものからどんどん使っていて、ある時、奥に残っていたものの期限が切れて使えないと判明しました。さすがにスタッフたちも『やっちゃった…』と反省している様子だったので、今がチャンスだと思い、すぐに冷蔵庫内の整理・整頓や期限のマネジメント表の作成を提案して進めるようにしました」

もっとも当のスタッフたちは、一時的に落ち込んでも翌日にはケロッとしていたと苦笑する芦川さん。それもケニア人のいいところだという。

「ケニアの人たちはとにかく陽気で明るく、一日一食おなかいっぱい食べたらものすごく幸せ。もう何もいらなから仕事もしない(笑)。お金を無心されたりして閉口することもあります。根本的には優しさにあふれた人たちです。『1人で日本から来て寂しいでしょ』『一緒にご飯を食べよう』と、温かく受け入れてもらえたことは、本当に嬉しい経験でした」

帰国後は保健所勤務を経て、大学院で公衆衛生の修士を取得し、外務省国際保健戦略官室での仕事も経験した芦川さん。協力隊経験は帰国後のキャリアの土台になったようだ。

日本式のやり方を一方的に伝えず、 行動を見せながら少しずつ変化を目指す

日本での教員経験を経て、念願だった協力隊に応募、2023年からナイロビの北東に位置する町、ティカで活動しているのが松井秀人さんだ。親から虐待を受けたり養育環境が悪かったりと、不遇な立場にある6歳から20歳の子どもや青少年およそ50人が暮らす、ティカ一時保護施設が配属先だ。松井さんへの要請は主に子どもたちの余暇活動を充実させることで、体育、美術、音楽など何でもOKと言われた。「子どもたちが学校から帰ってくる午後2～3時からが、僕の活動時間の中心になります。従来の余暇は外でサッカーをするくらいしかなく、スポーツが苦手な子もいるので、そういう子も楽しめる時間をつくりたいと試行錯誤してきました。最近は、絵を描くことにはまっている子が増えています」

紙やペン、絵の具は全くなかったのが、寄付で調達した。「駒ヶ根協力隊を育てる会を通じた支援で、文房具のほか鍵盤ハーモニカも頂きました。JICAの『世界の笑顔のために』

まつい しゅうと
松井秀人さん

ケニア／青少年活動／2023年度2次隊・長野県出身



PROFILE

大学在学中から「海外で子どもに関わる仕事をしてみたい」という思いはあったものの、具体的なイメージが湧かない中、長野県内の学校で教職に就く。3年目頃から、海外で働きたいとの気持ちが再燃すると共に、「日本の子どもより不遇な立場にある、海外の子どもたちの成長に関わりたい」とも感じ始め、4年間の教員生活に終止符を打って協力隊に応募。現在、ナイロビの北東部のティカで活動中。

プログラムも活用していますし、元々配属先にさまざまな援助が入っていることもあり、ナイロビの日本人学校やインドのチャリティ団体からも支援を得ています」

物もそろって、子どもたちの意欲もあるが、なかなか活動が進まないこともある。

「子どもたちは学校から帰っても、施設を管理する社会福祉士のスタッフたちから草刈りや水くみなどの仕事を指示されて、なかなか自由な時間が取れません。僕はオフィスの扉を開けっ放しにして、仕事を終えた子が自由にやって来て、やりたい活動ができるようにしています」

松井さんのオフィスをリラックスできる場所だと感じたのか、最初は警戒心の強かった子も松井さんにハグをしたり、手をつないだりと愛情表現を示してくれるようになった。「この施設には3人の社会福祉士がいますが、忙しく、管理で手いっぱい。甘えさせる余裕はありません。また、ケニアではしつけの一環で子どもを棒でたたいたりする体罰が当たり前。初めて見た時には衝撃を受けました」

現地の文化や社会事情に基づく習慣でもあるため一概に否定はできないものの、棒でたたかれた子どもには、声をかけたり頭をなでたりとフォローするようにした松井さん。「僕のオフィスにいる時は悪いことをしても、言葉で説教をするだけで棒は絶対に使わない。ありのままの姿でいてもいいという環境をつくりたいからです」

子どもにとって、甘えられる人や場所が必要。松井さんの



配属先の子もたちと、学校から帰る道を歩く松井さん。「現地語学研修で1カ月いた大都會のナイロビとはガラリと様子が違い、自然が豊かで広々とした雰囲気。着任してみて、ここで2年間活動できるなんてとてもすてきだと思いました」

接し方は現地スタッフたちにも伝わってきている。

「施設長が僕のオフィスにやって来て、子どもたちと一緒に遊ぶ機会が増えました。いきなりやって来た日本人が自国のやり方を訴えても受け入れられないでしょうが、現地の人と時間をかけて関係性をつくりながら、実際にやってみせていくと、なるほど、日本はそうなんだ、と納得してくれることが多いように思います」

配属先での活動の傍ら、ケニア隊員有志による学生支援団体「KESTES(※)」の活動にも関わる松井さん。

「僕はグッズ班の一員として、日本文化イベントなどで寄付を集めるため、ケニア人にチャリティグッズを作ってもらったりする役割を担当しています。配属先での活動と別の角度からも児童支援ができて意義を感じますし、隊員同士のつながりができ、互いに活動のヒントを得られることも多いです」

残された任期はあと3カ月。9月にナイロビで開催される「日本人ふれあい祭り」に向けて配属先の子もたちとダンスの練習をするなど、最後まで活動の予定が詰まっている。「ケニアでいろいろな人と関わる中で、僕自身も人生の楽しさを知ることができたと思います。配属先への支援はまだまだ足りているとは言えないのですが、物がなくても工夫して楽しむ子どもたちの姿からも学ぶことは多いです」

※KESTES…Kĩkenya Students' Educational Scholarshipの略で、人格・成績が優秀ながら経済的理由で就学できないケニア人生徒に対し、奨学金支給や学習・生活のフォローを行うケニア隊員有志の団体。現役隊員とOVの連携で運営され、1983年の発足から40年以上の歴史を持つ。

活動の舞台(裏) — 年功序列が根づいた社会

アフリカには「年上の人を尊重する」文化があると話すのは白鳥さんだ。「年を重ね、今では現地の人から『ママ・シラトリ』と呼ばれて若い頃より信頼・尊重されるようになりました。年長者は経験や知恵をもつ指導者・助言者として扱われ、活動もスムーズです。ただ、年長者の言葉に反対する人は少ないので、本当にいいの?と不安になることもあります(笑)」。

特にケニアでは老人は知恵の宝庫とされ、一人の老人の死は“図書館一つがなくなる”ほどの損失と考えられているという。「今思うと、若い隊員が立場ある人にいきなり意見するなど、現地文化ではあり得ないことだったんです。それを理解せず行動していたのが今は恥ずかしく思えます」。

現在活動中の松井さんも「大人に対して偉そうな口のきき方をする子どもはいない」と話すように、年長者を敬うという伝統は、現代の若者たちに至るまで、まだまだ健在なようだ。



写真：佐藤浩治/JICA

年長者や目上の人を敬うことは幼少期からのしつけで定着している

お悩み相談

アドバイスも聞きました!

今月のお悩み

体育の授業で球技の試合をさせたところ
不正なプレーをして勝とうとする生徒がいます
(マラウイ/体育)

小学校に配属されて体育の授業を担当しています。基礎体力向上のための体操だけだとすぐに飽きられてしまうため、楽しんでもくれるのではと球技などの試合をさせると、審判役の子どもや先生の目を盗んで反則行為をするなど、“ズル”をして勝とうとする生徒が目につきます。そうした行為を減らすにはどう教えればよいのでしょうか?



齊藤先生からのアドバイス

いきなり試合をさせるのではなく、
技能面の練習を通じて意識の変化を促しましょう

体育の授業で球技を取り扱う際に、いきなり試合(ゲーム)をさせてしまうと、子どもたちは試合に勝つことに全力を尽くすことになり、結果として、勝つためにはフェアでないプレーをしてしまう可能性も出てくると思います。試合を正しく行い、かつ楽しめるようになるためには、準備も必要になります。本格的にゲームを行う前に、スポーツを楽しむためのマインドや姿勢、技能を身につけてもらうことが重要です。

そこで有効なのは、技能面のアプローチです。例えば球技ならば、まずはボールを操作するための練習。次に、ボールを持っていないときにどう動けばよいのかの学習も必要です。その上で、実際の試合に近づけた「タスクゲーム」を行い、最後に試合をするという流れが良いでしょう。タスクゲームとは、試合の中で個人・集団としてどのように動けばよいのかという戦術的能力の育成を目的として、課題を立てて行うゲームのことです。

このようなステップを踏みながら授業を構成していくと、勝ち負けだけでなく、練習してきた技能・スキルをゲームの中でどう活かすのかという点に重きが置かれるようになり、フェアでないプレーをする場面は減るでしょう。

体育で球技などのスポーツを扱う際、上記のような教育的価値を教員自身が授業の中でどれだけ引き出すことができるかは、腕の見せどころです。子どもたちが勝ち負けだけにこだわっているとすれば、授業の中で、スポーツの価値を十分に伝えられて

いない可能性があります。このように、試合を行う前にスポーツを正しく行うための心構えや各種スキルをいかに高められるかがフェアなプレーをする精神を育む上で重要なポイントです。

ルールを守ることはスポーツを行う上で最も大切なことで、スポーツは世界各国で共通のルールがあるからこそ、世界中で楽しむことができる素晴らしい文化なのです。ぜひ、ルールを守る大切さとその意味について、たとえ地道でも子どもたちに伝えてください。体育が十分に成熟していない国々において、授業の中で正しくスポーツを教えられていない学校も多くあると思います。時間がかかるかもしれませんが、協力隊員のふるまいを生徒も同僚の先生たちも見ているはずですから、正しく楽しいスポーツができるよう、体育の授業を工夫してみてください。



今月の先生

さいとうかずひこ
齊藤一彦さん

シリア/陸上競技/
1993年度1次隊・山口県出身

広島大学大学院人間社会科学研究科教授。教員を目指していたが、人と違う経験を積みたいと大学卒業後、協力隊に参加。シリアで陸上競技の指導を行った。スポーツが人間の内面に与える影響などに関心を持ち、大学院へ進学。JICA客員研究員、日本学術振興会特別研究員などを歴任。専門はスポーツ教育学、スポーツ国際開発学。

Text=三澤一孔 写真提供=齊藤一彦さん

特集 歴史に息づく隊員の奮闘



今年8月に横浜で開催される第9回アフリカ開発会議（TICAD 9）。これまでのTICADの歴史の中で日本とアフリカの間で実施されてきた支援の現場では、数多くの協力隊員が貢献してきたはず。今回はそんなエピソードの一端をご紹介します。

Text = 飯渕一樹（本誌） 写真提供 = ご協力いただいた各位



TICAD 4で掲げられたコメ生産倍増 現場で奮闘した隊員たち

広域研修で周辺国から集まった隊員たちに稲刈り技術を指導する坪井さん（写真：篠田有史/JICA）

2008年、TICAD 4においてJICAはアフリカでのコメ生産量倍増を目指すイニシアティブ「アフリカ稲作振興のための共同体（CARD）」を発表した。急速な人口増加や都市化でコメの需要が急増し、輸入依存や価格高騰といった課題が生じる中、向こう10年間で生産量を2倍にするという目標を掲げた。この目標は宣言通り18年に達成され、さらなる生産増に向けた目標が掲げられるに至ったが、その背景には協力隊OVの稲作専門家である坪井達史さん（フィリピン／稲作／1975年度1次隊前期）と、数多くの“ネリカ隊員”たちの努力があった。

日本大学農獣医学部拓殖学科を卒業した坪井さんは、旅行で訪れたインドでOTCA（現 JICA）の技術協力を見たことがきっかけで協力隊への参加を決めた。

赴任したフィリピンでは稲作とスイカ栽培の二毛作の指導に取り組み、任期終了後も稲作技術で国際協力に携わり続ける意志を固めて帰国した坪井さん。当時開始されたJICA海外長期研修制度の第1号生として、1979年から2

年間フィリピンの国際稲研究所に所属し、稲作について体系的に学んだ。その後、81年からJICAの稲作専門家としてフィリピン、インドネシアなどアジアの国々で稲作指導に取り組み、「アジアではやり尽くした」と感じていた92年、今度はアフリカのコートジボワールへと派遣されることになった。



坪井達史さん
（フィリピン／稲作／1975年度1次隊前期）

坪井さんが西アフリカ稲作開発協会（WARDA）で目の当たりにしたのは、従来不可能とされてきたアジア種とアフリカ種の交雑種だった。それまでは実がなる例はまずなかったもので、たとえわずか3粒であっても、実際に粳が稔実するとは想像さえしなかった。

アフリカでコメは食料であると同時に換金作物でもあり、コメの増産による現金収入は、農民の生活水準の向上にもつながる。

坪井さんが本格的にアフリカでネリカ米と向きあうのは2000年代に入ってからで、アフリカ各地の事前調査を経て坪井さんはネリカ米の拠点をつウガンダに定め、04年から品種試験や増産の準備を進めた。そして08年のTICAD 4でのコメ生産量倍増の表明を経て、ネリカ米普及の活動が本格化する。

ウガンダでのネリカ米普及

標高が高く、赤道直下ながら年間を通じて気温が快適で、2回の雨期による豊かな降水量から一年中稲を栽培できるウガンダは、ネリカ米普及の拠点として最適な場所であった。陸稲、天水稲作だけでなく、種まき、田植え、稲刈り、

ネリカ米とは

病気や乾燥に強いアフリカの在来種であるオリザ・グラベリマ種と、高収量のアジア種であるオリザ・サティバ種の長所を併せ持つ新しい品種は、後に「アフリカのための新しい稲（New Rice for Africa）」＝「ネリカ米」と名付けられた。

現在ネリカ種は陸稲・水稲など合わせて約80の品種に分かれている。コメが一般的に生育に150日程度かかるのに対して90～120日程で成熟し、収穫までの期間が短いという特性があるため、短い雨期でもコメを収穫できる可能性が高くなり、また、雨季に湛水して従来の畑作物が栽培できない未利用の低湿地が適地となる。栄養価に関しては、アジアの品種よりタンパク質の含有量が平均25%も高いものもあり、当時新たに誕生したネリカ米はまさに夢のコメといえた。



写真：佐藤浩治/JICA



研修では縄のない方など、現地で役立つ技術を指導した（写真：篠田有史/JICA）

精米と各種実習も同時に行うことができるというメリットもあった。他方、稲作の伝統があるアジアとは違って専門知識を持つ人はおらず、コメは店先に並ぶ高価な商品程度の認識しかない。コメ作りのすべてをゼロから教えていかなければならなかった。そんな状況の中、ネリカ米普及を進める坪井さんの活動を支えたのが協力隊員たちであった。

ウガンダでは01年から協力隊の派遣が始まり、坪井さんのウガンダ赴任と時を同じくし、隊員数も順調に伸びていき、08年時の隊員数は100名を上回った。協力隊員を通じたネリカ米普及という坪井さんの構想に、当初はJICAウガンダ事務所も懐疑的だった。それでも同時期に国立ドホ灌溉施設に派遣された中村麻依子さん（ザンビア／稲作／2002年度2次隊、短期／食用作物・稲作／2005年度9次隊）の「今話題のネリカ米の栽培を始めたが、これは圃場を訪れた農民の興味を一番引いていた」という報告から、現地での関心の高さがうかがわれた。坪井さんは06年、隊員5人にネリカ米の普及を依頼。隊員たちを「ネリカ隊員（※）」と呼び、共に活動を始めた。

もっとも、彼らの多くは村落開発普及員などの職種であり、農業経験は乏しかった。坪井さんは、やると決めたのであればCARDの一翼を担う1人として自覚とプライドを持

つことや、素人だからと言い訳せず少しでもプロに近づけるよう勉強し経験を積むことを求めた。そして机上の理論ではなく、実際にコメをつくり「1haあたり2トンの現状で満足している農家に、5トンの収穫を見せて驚かせてやろう」と士気を高めた。

14年、坪井さんは10年間活動したウガンダを離れ日本に帰国する。しかし、坪井さんの帰国後も11年から開始されたコメ栽培の普及・定着を目的とした「コメ振興プロジェクト」（PRiDe）が24年3月まで続き、コミュニティ開発、食用作物・稲作栽培などの職種で、プロジェクトを現場で遂行するための隊員も派遣された。現在、24年7月から始まった「持続的なコメ振興プロジェクト」（Eco-PRiDe）が継続中だ。

TICAD 4で掲げられた目標通り、サブサハラ・アフリカのコメ生産量は08年の1,400万トンから18年には2,800万トンを実現。CARDフェーズ2ではさらなる倍増計画として、30年までに5,600万トンの生産を目指しているが、現在はネリカ米だけでない多様な品種の開発、バリューチェーン構築や官民連携など支援の幅が広がっている。当初は陸稲中心だったネリカ米もさまざまな水稻品種が開発されており、多くの国で重要な品種としての地位を占めている。



コロナ禍後に赴任した田中 慧さん（ケニア／コミュニティ開発／2021年度7次隊）は農家の収入向上のための新たな選択肢としてネリカ米を提案。任地の農家に好評を博し、急速な普及を実現した

そもそも

TICADとは？

TICADの正式名称はTokyo International Conference on African Development（アフリカ開発に関する東京国際会議）で、日本政府の主導により始まった。第1回は冷戦終結後の1993年、アフリカに対する国際社会の関心が薄れつつある時代背景下で、東京にて開催された。東京宣言での「アフリカの自助努力の必要性」や「南南協力の推進」への言及のほか、当時の細川護熙首相の基調演説での「改革支援」「人造りへの積極支援」「援助国、被援助国を超えた良き友人関係の構築」など、現在の日本政府の支援方針につながる理念が示されている。

2008年、横浜開催のTICAD 4では福田康夫首相が全体議長を務め、基調演説で「対アフリカODAの倍増」や「対アフリカの民間投資の倍増支援」といった支援策を打ち出し、コメ生産量倍増にも言及。その後、横浜のほかナイロビやチュニジアでの開催を経て、今年8月20日から22日まで横浜で開催されるTICAD 9では、ユー

ス政策提言プロジェクトの一環としてYouth TICAD 2025が行われる。



写真：JICA

2016年にナイロビで開催されたTICAD 6でJICAが立ち上げた「サヘル・アフリカの角砂漠化対処を通じた気候変動に対するレジリエンス強化イニシアティブ」の準備会合

※…ネリカ隊員数は2019年末時点で350人に上り、その後も増え続けてきた。

今回のTICAD 9では会期中に Youth TICAD 2025が実施されるなど、
「ユース(若者)」が重要なキーワードとなっています。
ここでは若くして協力隊員としてアフリカに関わり、協力隊での活動を終えた後も
直接・間接にアフリカと関わってきたOVたちを紹介します。



協力隊後の進路

ベナンで起業→ 日本へ帰国し、NGO職員に

わたぬきだい ち
綿貫大地さん

ベナン/コミュニティ開発/2017年度2次隊・千葉県出身

コミュニティ開発隊員として、ベナン南部のコヴェという町で農家を対象にした収入向上・生活改善に取り組みました。主な活動の1つが、SHEP（市場志向型農業振興）アプローチを用いた農家グループの収入向上プロジェクトです。栽培技術だけの支援と違い、農作物を販売するところまで含め、農業をビジネスとして捉えるような意識変革を促すことが狙いでした。最終的に、対象の農家グループは前年比120%も利益を向上させることに成功しました。

当時出会った野菜農家たちは皆一様に農業に対するやる気があり、仕事に真摯に向き合っていました。彼らにもっと豊かになってもらいたいという想いから起業を決意し、SHEPのプロジェクトで農家グループのリーダーをしていた男性を共同創業者として2021年に立ち上げた会社がAgri-Missionでした。

起業に先立つ調査で、消費者が多い都市部で販売するには輸送・コンネクションの問題を抱える地方農家と、不衛生な市場を避けて安全で質の高い野菜を購入したい都市部の消費者との間で、

マッチングに課題があることがわかりました。そこでウェブアプリやモバイルマネーによる注文システムを活用し、私たちが地方の農家からまとめて買い取った野菜を、都市部で直接配達して売るというビジネスを立ち上げました。利益の確保に苦労したほか、当初はベナン人職員に日本的な業務水準を求めるあまり、互いにギスギスしてしまう失敗も経験しました。

現在は共同創業者にAgri-Missionの経営を任せ、私は日本に戻っています。彼は私が今まで出会ったベナン人の中で最も信頼している人物で、しっかりAgri-Missionを運営して日々改善を

続けてくれています。彼には会社の一層の拡大だけでなく、将来的にはベナンという国の発展を引っ張っていける存在になってほしいと願っています。私自身はササカワ・アフリカ財団に所属し、アフリカへの農業支援に携わっています。当財団は35年以上アフリカで農業技術の普及を行っており、より多くのアフリカ諸国で小規模農家の支援ができると考えて入職しました。今後に向けては、一人でも多くのアフリカの農家の所得を向上させることと、思い入れのあるベナンで小規模農家に良いインパクトを与えられる新規プロジェクトを立ち上げることを目指しています。



野菜の直販事業のほか、直売所の運営などにも取り組んだ



Agri-Missionでパートナーとして契約した農家の男性と。収入が増えたことで喜びの声も聞かれたという



協力隊後の進路

日系NPOの一員として ザンビアで活動→ 日本国内の中学校に勤務

たけ や きょういち
竹谷郷一さん

ミクロネシア/体育/2012年度3次隊、
ザンビア/体育/2017年度1次隊・神奈川県出身

ミクロネシアでの協力隊経験を経て、2度目の協力隊派遣でアフリカのザンビアに赴任したのが2017年。配属先は国内中部に位置するムフリラの教員養成校で、教員を目指す生徒に向けて体育全般を教えました。活動を始めてみると、多くの途上国の例に漏れずザンビアでも体育の授業が座学中心になりがちという課題があり、実際に体を動かす体験をしてもらえるよう、できるだけ実践を取り入れるようにしました。

新たに建設されたプールでの授業にも力を入れていたのですが、ザンビアは内陸国で、しかも川にはワニがいることもあり、多くの人にとって水に入る機会自体が非常に少ないという事情があります。そのため、当初は誰もが



隊員時代、水に入る習慣の少ないザンビア人学生たちに水泳を教える竹谷さん

顔を引きつらせていたのを覚えています。ですが、何回か指導するとすぐに慣れて、多くの生徒はプールの幅一杯、20m程度は泳げるようになり、校内で私の顔を見るたびにもっとスイミングを教えてくださいと声をかけてくれるようになりました。

当時、私の任地近くのプロサッカーチームに横浜F・マリノスから中町公祐選手が移籍を検討中で、通訳のできる日本人として関わるようになりました。移籍が実現すると、中町選手がNPO法人Pass onを立ち上げて現地へのボランティアも始めたことから、それを手伝うなどしていました。Pass onはサッカー用品の寄付と、現地の周産期医療の改善という二軸を掲げていて、協力

隊の任期が終了した後には私も正式に所属して4年ほど現地での活動に従事しました。

一昨年の末に日本へ帰国した後は国内の中学校で教員として働くようになり、現在は不登校児童を受け入れて学校生活に慣れさせる専門のクラスを担当しています。今年から自治体で本格化した新しい試みということもあって担当教員の裁量がかなり利くため、アフリカなど各国の置物を置いたり、現地とウェブ会議システムでつないだりという試みをしています。昨年度は国旗かるたも紹介したところ印象的だったようで、美術など他の場でも、絵の具の配色などを見て「これは〇〇の国旗みたい!」と喜んだりする子がいました。中には193カ国すべてを覚えた子もいて、彼らの世界観を広げることに貢献できている手応えを感じています。



プールに慣れてはしゃぐ生徒たちと竹谷さん



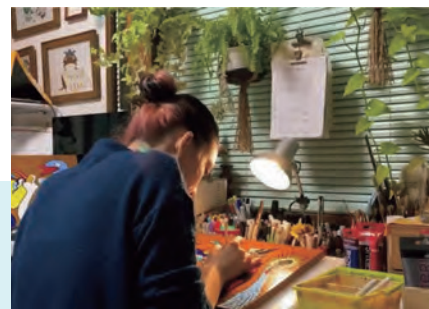
任期終了後のPass onでの活動では、約束がなかなか履行されないことも多いアフリカ事情に改めて苦労したという

私はケニア野生生物公社（KWS）が管理する国立公園・保護区の一つ、ワタム海洋国立保護区に配属され、近隣小学校での巡回授業や海岸の清掃などを通じた環境啓発活動を行いました。そうして活動が続ける中で増してきたのが、一緒に働くスタッフや近隣住民たちにもっと美しい海の生き物の様子や、海の現状を知ってもらいたい！という思いでした。そこで、しばらく使われずにご近所さんやスタッフたちの憩いの場と化していたインフォメーションセンターを復活させようと取り組みました。

特に掲示物をもっと見やすく興味を引くものにしたいと考え、写真やイラストを増やそうとしました。とはいえ、すぐに野生のイルカなど海の動物の写真を撮ってくるのは難しく、自分の手でイラストを描くということにも取り組みました。これは好評で、大人から子どもまで楽しく興味を引かれた様子が見られるようになりました。スタッフたちも私がイラストを描く姿に興味深そうに



任地のワタムはケニア東部、インド洋に面する海辺のエリアで、豊かな海洋環境に多くの生き物が生息する



イラスト制作に取り組む武田さん

のぞきにきて、それがきっかけで掲示物も見えてくれたりと、皆に対して効果があったように思います。

また、他のケニア隊員たちから活動に使うポスターやキャラクターの絵を描いてほしいと頼まれたこともあり、私の絵が皆の役に立ち、喜んでもらえる嬉しさを知りました。イラストを通してなら、子どもの頃から憧れてきたアフリカや野生動物の保全活動にもっと関わることがあるのではないかと思います、帰国後は思い切ってイラストレーターという道を選びました。

私の一番の関心はやはり雄大なアフリカで暮らす野生動物たちなので、アフリカの動物を題材にしたイラストを多く描いてきました。その時に意識しているのは、自分が見てきたアフリカを

描くこと。例えば、カバの色は日本の動物園で見ると茶色く、一般にもそう描かれがちですが、私が現地で見た時の印象は紫色！現地に特有な何らかの環境条件により、人間の目の見え方やカバの状態が違うのでしょうか…それをイラストにも反映しています。これからも自分の見たアフリカの姿をイラストにして伝えていくつもりです。

野生動物たちの保全には、そこに暮らす人々が健やかであることも、とても重要だと考えています。外側からだけではなく、隊員として2年間ケニアで過ごした経験を基に、表情豊かな野生動物や人々の魅力をもっと日本の人たちに伝え、少しでも現地の状況に関心を持ってもらうきっかけを作っていきたいです。

協力隊後の進路

アフリカを題材とし、「タケダミホ」の名前でイラストレーターとして活動

たけだ みほ
武田美穂さん

ケニア／環境教育／2009年度3次隊・東京都出身



自身のイラストによる大型パネルとの一枚。イラストを通じたアフリカ理解のための取り組みを続けている

スキルや意欲で道を開く

就職 ストーリー

野生動物を取り巻く環境を伝えることで
動物と人間の共存の懸け橋になりたい

Text=油科真弓 写真提供=大河原沙織さん



今月の先輩

おおかわら さおり
大河原沙織さん

ペルー／環境教育／2018年度4次隊・
山形県出身

就職先 旭川市旭山動物園

事業概要 「行動展示」で知られる動物園。動物の飼育のほか、野外観察会や出張授業などを通じた環境教育、環境保全活動、調査・研究も行う。

大河原沙織さんの略歴

1994年 山形県生まれ
2018年3月 酪農学園大学卒業
2019年4月 協力隊員としてペルーに赴任
2020年4月 コロナ禍により一斉帰国
2020年4月～2021年3月 日本からオンラインで配属先を支援
2021年3月 任期満了
2021年4月 旭川市旭山動物園に入職

子どもの頃から動物が好きだった大河原沙織さんは、北海道の酪農学園大学で環境学を専攻し、野生動物管理学などを学んだ。大学の教員や先輩に協力隊経験者がいたこともあり、協力隊に参加したいと思うようになっていった。授業で旭山動物園がマレーシアのサバ州で行っている環境保全活動「ボルネオへの恩返しプロジェクト」を現地で見学したこと、フィジー留学やオーストラリアでのワーキングホリデーで海外生活を経験したことなどでその思いはさらに強くなり、卒業後に環境教育隊員として協力隊に参加した。

任地はペルーの沿岸部にあるパラカス自然保護区。約33万5,000haのエリアに海と砂漠が広がっており、オタリア（南米に分布するアシカ科の動物）やフンボルトペンギン、フラミンゴなど多様な野生動物が生息している。この区域の生物多様性を守るための環境教育や啓発活動を地域住民に対して行うことが要請内容だった。「子どもたちは保護区にどんな動物がいるのかわらず、目にする機会もほとんどありません。まずは地域にどんな動物がいるのかわかり、生物多様性に興味を持ち、



パラカス自然保護区で動物観察ワークショップを行う大河原さん

自然環境保全の大切さを感じてもらうことが私の任務でした」

3代目隊員だった大河原さんは、前任者が訪れていた小中学校の他にも巡回先を増やすと共に、1年間のカリキュラムを作り、観光客を対象

にした動物の解説やごみ分別などのワークショップも企画。また隊員に任せ切りになりがちな住民への環境教育を配属先の職員も行えるような仕組み作りも行った。

コロナ禍により帰国してからは、環境教育のための人形劇を動画にしてオンラインで発信するなど、配属先への支援活動を継続した。また、地元である山形の小中学校からの依頼で、ペルーでの活動について生徒たちに紹介するなど、国内での社会還元にも取り組んだ。

就職先である旭山動物園については、任期中から「働けたらいいな」と漠然と思っていたという。

「動物を見る機会が少ないペルーの子どもたちを見て、世界の動物を間近に見られる日本の動物園に大きなポテンシャルを感じたのが一番の理由です。学生時代に旭山動物園のプロジェクトを見学していたことも大きかったと思います」

現在は飼育員として働きながら、恩返しプロジェクトを含むマレーシア・サバ州の生物多様性保全プロジェクトを担当。同プロジェクトがJICA草の根技術協力事業に採択されてからは動物園とJICA間の調整役も担うなど、活躍の場を広げている。



大河原さんは環境教育を行う小中学校を増やすことにも取り組んだ

1 求人情報をチェック 2020年秋～

帰国後しばらくしてから、環境教育に関わる企業や動物園の求人情報をインターネットで探し始めました。その流れで旭川市のハローワークのウェブサイトを見た時、旭山動物園が飼育員を求めているを見つけました。旭山動物園のサイトにはハローワークの指示に従うよう書かれていたのですが、当時は山形県在住で旭川まで行くことは難しかったため、山形県内のハローワークに相談しました。



2 書類提出 2021年1月

山形のハローワーク経由で履歴書を旭山動物園に郵送しました。履歴書には、協力隊の活動を通じて、野生動物を直接見ることができる動物園のポテンシャルを感じたこと、さらに動物園の生き物を通して、その動物が本来生息している自然環境について伝えられる飼育員になりたいと考えていることなどを書きました。



3 オンライン面接 2021年4月上旬

旭山動物園からは2カ月以上連絡がなく不採用だろうと諦めていたのですが、3月末にオンライン面接をしたいとの連絡があり、その1週間後に副園長2人とオンライン面接を行いました。面接では、どんな飼育員を目指しているのか、動物園でどんなことをやりたいのかを聞かれました。それに対して、学生時代に旭山動物園によるマレーシアでのプロジェクトを見学したり、協力隊員としてペルーの自然保護区で活動したりしていた経験から、野生動物と人間のあつれきから生じる問題はどの国にもあると実感していること、そうした動物と人間を取り巻く問題を伝えることで環境教育につなげ、動物や自然と人間の懸け橋になるような飼育員になりたいと話しました。



採用決定 2021年4月

現在の仕事

最初に担当したのはモルモット、去年からはアヒルとニワトリの飼育員を務めると共に、環境教育担当として小学校への出前講座、動物との「ふれあいガイド」などを行っています。コロナ禍で活動が停滞してしまったマレーシアでの恩返しプロジェクトに付随する新たなプロジェクトが始まり、私も担当しています。新プロジェクトは2023年3月にJICA草の根技術協力事業に採択され、畑や人里に現れたゾウを一時的に保護して森に帰すための保護施設での飼育技術向上と環境教育活動のレベルアップを目的としています。計画では今年7月から現地で動き始める予定です。



飼育員として来園者に動物と親しんでもらう大河原さん

後輩へメッセージ

私自身は帰国後にJICA PARTNERのキャリア相談を利用しました。その際、現場で働きたいのか、マネジメントをする側になりたいのか聞かれたことで、自分は現場に出て、そこにいる人たちと一緒に仕事をしたいのだと気持ちを整理することができました。また、学生時代から野生動物の保護に関わる人たちは憧れの存在であり、そうになりたいという思いも進路を考える上での指針になりました。協力隊での経験は自分の大きなベースとなるはずです。それを踏まえて自分がやりたいことは何なのか、見つけていってほしいです。

JICA 海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html



大

洋州の島しょ国で急速に失われつつある伝統文化を記録し、後世に伝えていく——。30年以上前の協力隊時代に課題を見だし、生涯続ける“本業”として取り組みようと、2014年にNPO法人パシフィカ・ルネサンスを立ち上げたのが、ミクロネシアOVの長岡拓也さんだ。同国最大の島、ポンペイ島にある巨石の人工島群「ナンマトル遺跡」の世界遺産登録に協力したことを皮切りに、伝統文化の記録・継承活動や歴史公園の整備計画の支援などに従事。中心的な活動として、伝統的な無文字社会の中で口伝されてきた昔話や歌謡などを高齢者から聞き取ってビデオに記録し、YouTubeで公開するプロジェクトなどに取り組んでいる。「国際協力の中でも“飢餓や貧困に苦しむ人々を助けよう”といったテーマと比べると会員や支援金は集まりにくい分野で、応募できる助成金やJICAプロジェクトの枠組みも少ないのが実情です。職業的に取り組むなら一番近い職業は大学教員でしょうが、私がやりたいのは研究室や教壇を拠点とする研究者になることより、お年寄りが亡くなるたびに消えていくような昔話や古いしきたりを現場で聞き取って記録し、若い世代に伝えること。片手間ではなく本業としてやりたいのです」

そんな長岡さんは幼少期から古代の遺物に興味があり、大学では考古学を専攻した。「大学院に進学して日本で研究者になる道をイメージしていたのですが、大学の先輩から協力隊に考古学という職種があると聞きました。自分の知識と技術で国際協力できることが魅力でしたし、途上国を経験し

て人間的に成長したいとも思ったのが応募の動機です」。

配属先はポンペイ州土地局歴史保護文化課で、要請は1980年代に設立されたものの管理体制の欠如で閉館となった歴史文化博物館を復活させることだった。「伝統的な生活形態が残る離島を回って民具を集め、展示ケースのペンキ塗りや展示コーナー作りまで自分たちでする“手作り”の博物館でした。開館後は伝統文化の記録や講習会も行い、とてもやりがいのある活動をさせてもらいました」。

任地での暮らしの中で「現地人になり切る」ことを心がけた長岡さん。お年寄りからの聞き取り調査も熱心に続けて伝統文化について多くの知識を蓄えたのに加え、日本人らしからぬ格好から、ホームステイ先のホストファミリーに「おまえはポンペイ人を超えている」と笑われたこともあった。「自然と調和して助け合う伝統的な暮らしに、最初はカルチャーショックを受けたのですが、その心地よさにだんだん“はまって”しまいました。ただ、ミクロネシアでも若い世代が伝統文化に無関心な風潮が進み、元々無文字社会で多くの知識が口承であるため、受け継ぐ人がいなければすべてが消えてしまう。そうした伝統を記録して残すことは現地でもほとんど誰もやっておらず、自分の存在意義を感じられる仕事だと思いました。こうして私の人生は決定づけられました」

帰国後、母校の恩師から「今後も国際協力の活動を続けるなら、大学院で専門的な知見を身につけてからのほうが貢献できるだろう」と助言され、ニュージーランドのオークラン

やりたい仕事が世になれば自分でつくる！ 失われゆく大洋州の伝統文化を後世に伝えたい

派遣から始まる
未来
先輩隊員たちの社会還元



NPO法人を設立し
大洋州の文化継承に取り組む

ながおかたき
長岡拓也さん

ミクロネシア／考古学／1991年度1次隊・奈良県出身



1 協力隊時代、機織り技術の記録と講習を行うプロジェクトに取り組む長岡さん 2 ミクロネシアのヤップ島で行われた伝統航海術の講習会を撮影する様子 3 ポンペイ島の老人から太平洋戦争での体験を聞き取って記録する長岡さん

Text＝大宮冬洋 写真提供＝長岡拓也さん

長岡さんの歩み

ド大学大学院に留学し、ソロモン諸島の考古学研究を行った。「博士課程の途中で、寄り道的にミクロネシアの伝統文化を記録するプロジェクトなどにも取り組んだりして、16年間にわたって大学院に在籍していました」

2012年の博士号取得後、自らが目指す活動が続けるため、問題意識を共有する仲間とパシフィカ・ルネサンスを設立するに至った長岡さん。コロナ禍前までは年間のほとんどをミクロネシアで妻子と過ごし、NPO活動だけに専念していた。「今は奈良県の実家に帰り、週に1、2回は国立民族学博物館で大洋州の民具に関するデータベース作りのアルバイトに就いています。パシフィカ・ルネサンスとしてやりたいことは山積していますが、特に優先順位が高いのは、伝統文化や歴史を現地の学校で教えるための教科書作りです。今後、クラウドファンディングにも挑戦したいです」

現在の正会員数は約20人だが、支援の確保や資金調達が一番の課題である状況は変わらず、毎年現地で活動できるのは長岡さん一人。ただ、現地人さえも驚くほど伝統文化や歴史に詳しい長岡さんには、長年の活動の積み重ねもあり、大洋州での活動や調査、映像制作などを企図する援助機関や民間企業、大学から協力依頼が集まってきている。

人当たりのよい性格と伝統文化継承への尽きない情熱、そして専門知識と実績。今や長岡さんは、世代や国境を超えて人と人をつなげる唯一無二のコーディネーターであり、地域の専門家となっている。



2



3

1968年 徳島県に生まれ、奈良県で育つ



父親の転勤で小・中学校時代に東京都羽村市で過ごした時期がありました。縄文土器・石器などを近所の畑で拾えて、将来は考古学者になりたいと思いました

1987年 広島大学文学部史学科に入学し考古学を専攻



考古学の勉強に加えて、サイクリング部に所属し、野宿をしたり山登りをしたりと冒険的なことが好きでした

1991年 新卒で協力隊に参加



博物館の再開館後、考古学の分野よりも、今まさに失われつつある伝統文化を伝えることに重要性を感じ、伝統的な舞踊、機織り、帆走カヌーの建造技術の記録や講習会に携わりました

1996年 オークランド大学大学院人類学科に入学



2012年に博士号を取得するまでいろいろ寄り道をしましたが、専門は大洋州地域の考古学と地域研究です。ミクロネシアとソロモン諸島を主なフィールドにしています

2014年 帰国後、協力隊OVや研究者仲間と共にNPO法人パシフィカ・ルネサンスを設立して代表理事に就任



伝統文化を記録して後世に伝えることに専業で取り組む道がないことを大学院時代にずっと悩んでいました。なければ自分でつくるしかないという発想で、NPO立ち上げを決めました

2016年 国際チームの一員としてパシフィカ・ルネサンスもナンマトル遺跡の世界遺産登録に協力



ユネスコの依頼で、ヤップ島で使われている石貨に関連する遺跡の世界遺産登録のための記録技術を指導したこともありまし。ユネスコの助成金で伝統航海術の記録とYouTubeへの公開も行っていて、この航海術や造船技術はその後、無形文化遺産に登録されています

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

REPORT

天皇皇后両陛下が帰国隊員と御懇談

2024年に帰国した協力隊員の代表が3月7日(金)、皇居(御所)において天皇皇后両陛下に御懇談の栄を賜り、派遣国での活動をご報告しました。帰国隊員と両陛下との御懇談は、1965年に青年海外協力隊が発足した当初から今日に至るまで続いています。今回帰国した隊員は、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響を受け、日本への一時帰国や国内待機を余儀なくされながらも、それを乗り越えて派遣国での活動に従事しました。両陛下にお目にかかったのはアジア、大洋州、アフリカ、中南米の国々に派遣されていた海外協力隊4人、シニア海外協力隊1人、日系社会シニア海外協力隊1人です。御懇談に先立ち、JICA本部(東京都千代田区)で田中明彦理事長とも面談しました。御懇談後、参加者からは、「両陛下が熱心に活動報告を聴いてくださったことに感銘を受けた」「温かいお言葉をいただき、今後の大きな励みとなった」などの感想がありました。



帰国隊員たちと田中明彦JICA理事長、大塚卓哉青年海外協力隊事務局長

PROGRAM

「世界の笑顔のために」プログラムの物品提供者を募集中

「世界の笑顔のために」プログラムの物品提供申し込みを7月に行います。本プログラムは、開発途上国で必要とされている、スポーツ、日本文化、教育、福祉などの関連物品を日本国内の一般の方からご提供いただき、JICA海外協力隊や在外事務所を通じて、現地の人々へ届けるものです。寄贈品が各国に届くと、現地の人々から提供者へお礼状が送られます。お礼状を通じて世界を知り、世界の笑顔が身近に感じられるプログラムです。昨年度は個人と団体から、スポーツ用品、楽器、玩具、福祉用具などさまざまな物品をご寄贈いただき、世界43カ国の希望者の元へ届けることができました。今年度も多くの方にご協力いただけるよう、ぜひお知り合いの方にもお声がけください。



プログラムの
詳細はこちら



RECRUIT

企画調査員(ボランティア事業)公募予定

2025年度第1回公募が2025年6月下旬から開始されています。企画調査員(ボランティア事業)はJICAの在外拠点において、主にJICAボランティア事業に携わり、JICA海外協力隊の活動全般をサポートしていただきます。皆様のご応募をお待ちしております。



- 募集期間(予定): 2025年6月下旬～2025年7月上旬
- 募集人員: 未定
- 契約期間: 2026年1月～2026年9月より2年間(予定)

NEWS

2025年春募集の説明会参加者数と応募者数

JICA海外協力隊の2025年春募集(長期派遣)が5月9日(金)に終了しました。募集期間中、対面式説明会とオンライン説明会が行われ、参加者数は対面式が延べ1,216人、オンラインが延べ2,709人でした。

応募者数は、一般案件が1,042人、シニア案件が45人でした。今後は選考を経て、9月に最終的な合否決定が行われる予定です。

編集後記

P5-8「派遣国の横顔」の白鳥くるみさん、当時の隊員同士の任地は隔絶していて通信環境も劣悪だったとのこと。ある時、最寄りの隊員への緊急電話が交換手から先へつながらず、バイクを2時間飛ばして直接向かうと、まさに交換手からのコールを隊員が受けているところへ同時に着くという珍体験をしたそう。奥地前進主義時代の生活ぶりには驚きます(飯淵一樹)

P23の再現料理で初めて「湯取り法」でご飯を作りました。アフリカやアジア原産の米に適した方法だそうで、嬉しいことに、米のでんぷんが溶け出した煮汁を捨てるため糖質カット効果があるそうです。これから米は“ゆでる”ことにしました!(阿部純一)

クロスロード

[2025年7月号]

第61巻第6号 通巻708号
発行日: 2025(令和7)年7月1日

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



- 本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
- 本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員(OV含む)の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

編集・発行: 独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力: 一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
デザイン: 亀井敏夫
印刷・製本: 弘報印刷(株) 校正: 佐藤智也

『クロスロード』は、
JICA海外協力隊の
ウェブサイトでも公開しています。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



JICA海外協力隊派遣現況

2025年5月末現在

現在の
派遣国数
74カ国



アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	37	1
エチオピア	18	
ガーナ	38	
ガボン	10	2
カメルーン	18	
ケニア	43	1
ザンビア	38	
ジブチ	13	
ジンバブエ	16	
セネガル	35	2
タンザニア	35	
ナミビア	9	
ベナン	26	
ボツワナ	27	3
マダガスカル	32	
マラウイ	40	
南アフリカ共和国	3	
モザンビーク	19	1
ルワンダ	33	1

アジア地域

国名	一般	シニア
インド	18	
インドネシア	41	
ウズベキスタン	16	
カンボジア	28	
キルギス	38	
ジョージア	14	1
スリランカ	20	
タイ	44	3
タジキスタン		5
ネパール	17	3
バングラデシュ	2	
東ティモール	27	
フィリピン	20	
ブータン	23	
ベトナム	47	
マレーシア	18	2
モルディブ	5	
モンゴル	36	4
ラオス	39	2

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	3	
サモア	14	
ソロモン	22	1
トンガ	18	
バヌアツ	19	
パプアニューギニア	18	
パラオ	25	3
フィジー	16	3
マーシャル	15	2
ミクロネシア	18	2

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	10	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	22	
チュニジア	8	2
モロッコ	32	1
ヨルダン	22	

中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン	5	10	1	
ウルグアイ	4			
エクアドル	33	4		
エルサルバドル	29			
キューバ	2			
グアテマラ	22			
コスタリカ	17			
コロンビア	26	5		
ジャマイカ	11			
セントルシア	12	1		
チリ	7	2		
ドミニカ共和国	21	1	7	
ニカラグア	18	1		
パナマ	18	2		
パラグアイ	27	5	8	1
ブラジル			52	1
ベリーズ	13			
ペルー	40			
ボリビア	47	1		
ホンジュラス	26			
メキシコ	21	9		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,593 (590/1003)	87 (64/23)	77 (27/50)	3 (1/2)	1,760 (682/1,078)
累計 (男性/女性)	48,749 (25,499/23,250)	6,735 (5,436/1,299)	1,679 (650/1,029)	555 (256/299)	57,718 (31,841/25,877)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊

シニア = シニア海外協力隊

日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊

(単位:人)

生物多様性の国コスタリカで過ごした 爬虫類だらけの日常！

くまがいひであき
熊谷栄明さん

エルサルバドル/ソフトボール/1976年度2次隊、SV/
コスタリカ/マーケティング/2015年度3次隊・兵庫県出身

私がシニア海外ボランティアとして活動したコスタリカは、エコツーリズムで世界的に知られる野生動植物の宝庫です。映画の世界では『ジュラシック・パーク』、『ジュラシック・ワールド』シリーズの舞台となり、コスタリカ沖合の孤島を闊歩する恐竜たちのイメージが描かれています。

もちろん現実に恐竜の潜むジャングルがあるわけではなく、首都サンホセを中心に都市開発も進んでいるコスタリカですが、大きなワニをはじめとするさまざまな爬虫類やカラフルな鳥類が数多く生息しています。ハリケーンによる土手の決壊で住宅街にワニが流れてくる事件もあり、さながら本当のジュラシック・パークといった印象もありました。

私の任地、グアナカステ県リベリア市では、身近な爬虫類といえばイグアナでした。現地では「ガ

ローボ」と呼ばれ、家の近くには巨大なイグアナ像のあるガローボ公園という公園まであったのですが、実物は頭から尻尾の先まで60cmほど。食用にされるわけではないため街中でも繁殖が進んでいて、家の屋根裏や配属先の中庭、公園の木の上など、至るところにたくさんのイグアナがいました。熟して落ちたマンゴーなどをおいしそうに食べていたりするのですが、近づこうとすると、目ざとく気づいてサッと逃げていってしまいます。

とある週末、ガローボ公園の木陰にあるベンチで涼んでいると、突然大きなイグアナが頭上からドサッ!と目の前に落ちてきました。日本には「サルも木から落ちる」ということわざがありますが、「コスタリカではイグアナが木から落ちてくるんだ!」と驚き、妙に感心したものです。



Illustration = 牧野良幸 Text = 熊谷栄明さん

任地の食生活に彩りき!

隊員めし

今月の料理・セネガル

現地の人たちの味覚に合わせて作った

親子丼のセネガル風



From Senegal



玉山さんはセネガルの教員養成校で図画工作や算数の授業を支援した



玉山さんが作った親子丼を食べる管理人家族



材料 (2人分)

鶏肉 (部位はどこでもよい) 200g
タマネギ 1個
卵 2~3個
干しシイタケ 3~4個
米 150g
水 (だし汁用) 200ml
しょうゆ 大さじ2
塩 小さじ1と1/2
砂糖 小さじ1と1/2
粉唐辛子 適量

レシピ

- ① だしを取る。ボウルなどに干しシイタケを入れ、水200mlに15分ほど浸してシイタケが戻ったら取り出し、できただし汁と分けておく。
- ② “湯取り法”で米をゆでる。鍋かフライパンにたっぷりの水 (分量外) と塩1つまみを入れ沸かす (水の量は米が躍る程度)。沸騰したら米を入れ再び煮立ったら弱火でゆでる (目安として15~18分程度)。少し食べてみて芯がなくなっていたら鍋を傾けて余分な湯を捨て、強火で2、3分ほど加熱して水分を飛ばす。
- ③ 具材を準備する。鶏肉は一口大、タマネギと戻したシイタケは薄切りにする。卵は溶きほぐしておく。
- ④ 鍋かフライパンにシイタケで取っただし汁 (シイタケが吸った残りはおよそ170ml程度になる) と、しょうゆ大さじ2、塩と砂糖それぞれ小さじ1と1/2を入れて煮立たせ、鶏肉、タマネギ、シイタケを入れて中火で煮る (目安として5分)。
- ⑤ 鶏肉に火が通ったら、溶き卵を回し入れ、卵にもしっかり火を通す。
- ⑥ 皿にご飯を盛り、⑤を煮汁ごとのせ、粉唐辛子をかけて出来上がり。

料理について /

配属先の小学校の管理人家族と交流していて、よくお昼ご飯をいただいていたのですが、ある日「日本ではどんなものを食べるの?」と聞かれ、「ご飯と一緒に食べる鶏肉が入ったオムレツがあるよ」と答えたことがあり、実際に味わってもらおうと作りました。味つけは濃い目で唐辛子の辛味を足し、卵にしっかり火を通すなど、その国の味や調理方法に近づけると現地の人々が食べやすくなります。管理人家族はおいしそうに食べてくれ、特に子どもたちが喜んでいました。



South Africa

公開！

私の派遣国生活

〔南アフリカ共和国〕

写真提供＝小池 毅さん Text＝阿部純一（本誌）



こいけ つよき
小池 毅さん

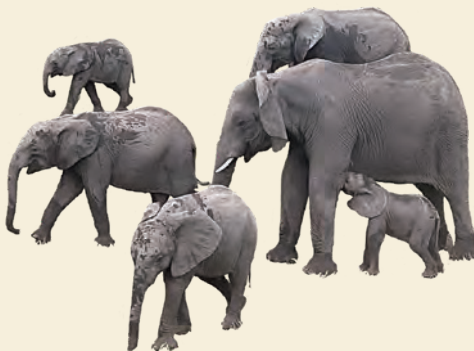
PCインストラクター／2024年度1次隊・東京都出身

暮らしている市、町、村



真すぐ伸びる赤土の道の先には山々が望める。「活動や生活で悩むこともありますが、風景を見ているとおおらかな気持ちになります」

赴任前は予想していなかったのが猛暑で、この前の夏は最高気温が48℃まで上がって驚きました。町には高い建物がなく、広大な大地の風景にアフリカに来ていることを実感します。最近は徒歩で学校に通う日もあり、挨拶や立ち話をする顔見知りの町の人々も増えてきました。乗り合いタクシーで行ける隣のマカドには、大きなスーパーやレストラン、トレーニングジムがあり、任地で手に入りやすい食品の買い出しなどのために週1回行くことが楽しになっています。



南アフリカは野生動物の宝庫。同期隊員と共にツアーで訪れたクルーガー国立公園に生息するゾウ



トウモロコシや大豆などが並ぶ路上売店。モバネワームという蛾の幼虫も売られていて、300gで500円ほどする現地では高級な食材



肉が安価に手に入る南アフリカでは炭火で肉を焼く「ブライ」が盛んに行われている

食べ物

トウモロコシの粉を練って作る餅のような食感の「パップ」を主食に、肉料理やビーツ、ハウレンソウ、バターナッツなどがワンプレートにのった料理がイベントや祝いの時に出され、主な味付けは塩やスパイスで、塩加減、辛さ、甘味が良い具合に混ざり合って好きな味です。こちらの人たちは肉を焼いて食べる「ブライ」が大好きで、皆で集まって牛や豚、ラム、ダチョウの肉などを焼いて味わいます。専用のスパイスもとても多くの種類があり、私も自炊の際にフライパンで焼いた肉でいろいろな味のスパイスを楽しんでいます。

活動の様子

行政首都プレトリアから北に380km離れたリンボ州ヴェンベ郡のダニエル・ムブヴァ小学校で、9歳から13歳までの子どもたちにパソコンを教えています。赴任してみると学校にあるパソコンは古過ぎたり故障していたりで使えないため、日本から持参した自分のパソコンを使いタイピングソフトで文字入力の練習などを行っています。もう一つ力を入れているのが柔道の指導で、私が柔道の有段者だと知った校長から頼まれ、授業として行っています。まずは子どもたちに柔道の楽しさを体験してもらい、徐々に礼儀作法も覚えてもらいたいと思っています。



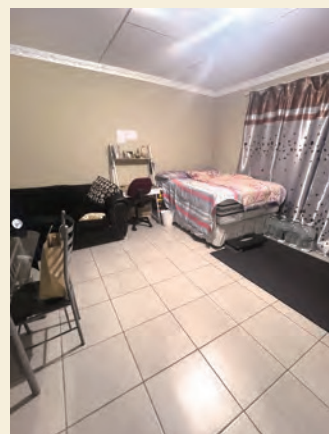
柔道の授業の様子。「子どもたちが柔道に興味を持って取り組んでくれるのが嬉しいです」



スライドを映写してキーボードの説明をする小池さん。「配属先では新たにコンピュータ教室を設ける計画があり、私も子どもたちがパソコンを使える環境を整えたいと思っています」

住まい

大家さん宅と同じ敷地内にあるワンルームの建物に住んでいます。壁に隙間が多く昼間のうちに温まってしまうため、夜でも暑くて保冷剤を抱いて寝るのですが、溶けると同時に目が覚めます。シャワーのお湯は太陽光で温める仕組みですが、晴れた日は触れないほどの熱湯が出てくるので、いったん冷まさないといけません。助かっているのが洗濯で、大家さん夫人が私の分も洗濯してくれるため、他の隊員からうらやましがられています。キッチンはないので、1つだけある棚にIHコンロを置いてそこで自炊しています。



小池さんの居室はワンルームで、洗面台つきのユニットバスがついている。一角には趣味の筋トレができるようにトレーニングスペースが作ってある



JICA海外協力隊
応援基金

皆様からの応援
お待ちしております



青年海外協力隊事務局
公式Instagram

JICA海外協力隊のリアル
お見せします



JICA_KYORYOKUTAI

JICA海外協力隊
公式LINEアカウント

シゴト診断、教えて！FAQ
などぜひ活用下さい

